

高学歴移民女性の「主婦化」の受容と抵抗

HAN Xing

本研究は、日本に移住した中国人高学歴女性が、移住後にどのようなキャリア志向を形成・変容させているのか、特に「主婦」という生き方の受容または抵抗のあり方に注目しながら、その実態と要因を明らかにすることを目的とする。従来の研究では中高年世代が主に分析対象であったのに対し、本研究は「80 後」「90 後」（1980～1990 年代生まれ）と呼ばれる若年世代に焦点を当てる。先行研究では、高学歴移住女性が日本の性別役割分業に直面した際、キャリアの喪失感や社会参加への欲求を抱え、「暫定的な専業主婦」や「自己探しのパートタイム」といった戦略的適応が強調されてきた（賽漢卓娜,2021）。しかし近年の中国社会は、市場経済化と競争の激化により、女性のキャリア継続がいつそう困難になり、同時に「35 歳の壁」に象徴される年齢差別も強く意識されている。また、日本社会でも母性中心主義は残りつつも、非正規雇用や柔軟な働き方が普及し、家庭と社会を行き来するライフスタイルが広がりつつある。このような二つの社会規範の枠くみの中で生きる若い世代の中国人女性移住者が、日本でどのようなキャリア志向やジェンダー観を形成しているのかは、未だ十分に分析されていない。

本研究では、探索的研究を目的として、「80 後」「90 後」に該当する高等教育機関を卒業・修了し、日本において合法的な就労に関する在留資格（永住者等も含む）を所持している中国人既婚女性に、2024 年 9 月から 2025 年 5 月にインタビュー調査を行った。インタビューでは、移住動機、キャリア形成、日本社会のジェンダー規範との関わり、家族や子育てをめぐる価値観、そして「主婦」「働く女性」といった役割の意味づけを中心に語りを収集した。中国と日本の社会的・文化的文脈の差異を踏まえながら、彼女たちがどのように自己を位置づけ、再構築しているのかを質的に分析した。

分析の結果、彼女たちの日本社会におけるジェンダー規範への向き合い方は、日本社会の価値観を肯定的に受け入れ、主婦を安定した生活の選択肢として評価する「内面化型」、日本の規範に距離を取り、働くことを自己実現の軸に置き続ける「距離化型」、そして家庭とキャリアを柔軟に対応しながら、自らの価値観を再構築する「探究型」という三つの類型が見いだされた。とりわけ「探究型」の存在は、主婦化を単なる依存や消極的選択ではなく、競争社会から距離を取り、自身の幸福や生活者としての価値を再定義する積極的な過程として再

解釈する姿勢を示していた。

本研究の事例分析から得られた主要な知見の一つは、中国から日本への比較的若い世代の移民女性が主婦という生き方を視野に入れながら、積極的にキャリアを選択しているという点であった。

中高年世代の高学歴移住女性にとって、「主婦になる」ことは社会主義期に内面化された「女性も働いて国家建設に参加すべき」という価値観との葛藤を伴うものであり、日本で主婦として過ごすことは、あくまで戦略的な選択として理解されていた。このように、本研究の対象となった「80 後」「90 後」の世代は、主婦になることを「流れで」「自然に」と語り、その位置づけを自らの価値観を再編成する一つの契機として捉えていた。この違いの背景には、中国と日本の両社会で生じた規範の変容がある。市場化が進んだ中国では、結婚・出産によって女性のキャリアが中断されやすくなり、「働く女性＝理想像」という従来の社会主義的価値観が弱まりつつある。他方、日本では母性中心主義が残る一方で、パートや非正規といった多様な働き方が広がり、「主婦」であっても社会参加が可能な環境が整いつつある。こうした両社会の規範の揺らぎの中で、若い世代の女性たちはどちらか片方の価値を全面的に内面化するのではなく、その間で自らの立場を主体的に選び取る余地が生まれていると考えられる。さらに、中国の激しい競争環境を経験してきた彼女たちにとって、日本での生活は「働かない自由」を実感できる初めての場となった。中国では「働くこと」が社会的義務として強く期待されるが、日本ではその就業圧力が大きく弱まるため、彼女たちは働くことを義務ではなく「選択」として捉え直すことができていることがわかる。この点が、「探究型」が現れた重要な要因である。つまり、主婦として生きることはキャリア放棄ではなく、競争社会から距離を置きつつ、自分自身のペースで幸福や生き方を再構築するための積極的な選択として意味づけられている。

本研究の事例分析はサンプル数が少ないこともあり、得られた知見を一般化することには限界がある。今後は量的調査によって知見の検証を進めること、また男性移民との比較を行い、ジェンダー差を明確化することが求められる。